

ファーラービーにおける自然哲学

－ウイグル哲学におけるギリシア哲学の受容Ⅱ－

ムフタル・アブドゥラフマン

九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

iltabir1119@yahoo.co.jp

序

ファーラービー（八七〇～九五〇）は世界の根本的本質、及び世界における人間の能動的位
置について体系的な哲学と存在論を形成した。彼はこの哲学を自らの人文主義的及び社会・
政治的思想と合致させ、それによってファーラービー哲学体系の全体像を我々に示している。
彼の哲学体系の基盤においては、世界の本質、そして世界における人間の能動的位
置、つまり人間が世界の本質を認識し把握する可能性が問題であった。世界の本質とは何か。世界
の本質の構成要素とは何か。世界における無数の諸現象と変化の根本的諸原因は何か。…これ
らの問いは彼にとって、自然哲学と宇宙論において解決すべき根本的問題であった。

ファーラービーの哲学体系は二元論ではなく、宇宙を一体化された構造（システム）と見
なす一元論である。彼の宇宙論は、客観的世界と主観的世界を対立したものとは考えない。
つまり、彼は「大いなる宇宙と小さな宇宙（人間・人類）が必然的関連性を持つ」、「構造的
統一性を持ち」と考える¹。これは「万物一体 WEHDETI MEWJUT」思想の表象として考えられ
うる。

一 存在論

「存在」概念はファーラービーの自然哲学と宇宙論の最も根本的な概念である。彼は「存
在」を二種類に分ける。永遠不変な（生成消滅しない）存在と可變的（多様な形相を呈する）
存在である。彼は「存在」のこうした二種類の在り方を、さらに、その弁証論的能動性、法
則性、自律性の観点から、それぞれA.「独立（自律）的存在」（MEWJUDI WAJIB）とB.「非独
立的存在」（可能態的存在 MEWJUDI MUMKIN）という二つの意味で性格付ける。彼はこの問題
について次のように語る。

「あらゆる存在は（1）自ら存在することができる、ないし、（2）自律的に存在するこ
とができない…自ら自律的に存在することができるものが物体・実体と名付けられる。自らに
よって存在できないものを我々は可能態と呼ぶ」²

ファーラービーはここで、存在の二種類の形態を実体と可能態に区別し、またさらに第三
段階によって、つまり、必然性と可能性の概念によっても表現する。

第一に、ファーラービーは上述の二種類の存在（KUN）を、非存在一無（LAKUN）の概念に
対立させる。彼は次のように語る。「世界は素朴な物体・実体から構成される・・・世界の自

¹ W・P・デミデチク、『ファーラービーの宇宙論およびその根本的諸起源』、『アル・ファーラービー研
究』研究論文集、二五頁参照

² M・M・ハイルルライフ：『ファーラービー・時代・教説』二一七頁参照。

ら分離自律的に如何なるものも存在しない」³。

第二に、彼は質料と形相を区別して二つの客観的カテゴリーとして考える。「世界は質料とそのある一定の存在形相から構成される。自然は独立であって、その過程も自然の性格を持つ」。ファーラービーの考えによると、実体は世界の普遍的基盤・基礎であり、その可変的形態（諸可能態）が形相である⁴。「実体がなければ形相は成立しない。質料がなければ存在が成立しない」。ここで質料の絶対性、永遠性、さらに生成消滅を超える根源的核心が考えられている。形相は質料の具体的形態様式である。具体的現実的・事実的物体が絶えずに運動し続けて、変化して、一つの状態からもう一つの新しい状態・形態に引き換え続ける事実的、質料形態・形相あるいはその構造を提示する。ファーラービーの形相概念は直感的に見ると、複雑のように見えるけど、しかし、本質的に考えると、質料の保存は形相であり、形態、活動（運動）形式に他ならない。ファーラービーは質料と形相を一体化して考える。彼が反プラトンの、自らの世界の構造についての教説に、質量は特に顕示的に位置付けられる。ファーラービーは質料のこうした諸形相の研究を、自然学の根本的対象として考える。

第三に、すべての存在は、質料のある一定の具体的形相を持つ可能性がある（ポテンシャル的な）可能態と、そしてそのある一定の具体的形相と実体という二つのカテゴリーに分けて理解する。彼の考えによると、「実体と可能態（形相・形態）以外の如何なるものも存在しない。あらゆる科学・学問も実体と形相の原因で生成・成立する。実体は自らの本性・本質によって運動し続ける」⁵

ファーラービーの存在論における実体（JEWHER）概念と形相（ACSIDENATSIYE・BILERDI）概念は、我々の理解している物質的存在の形相と質料の概念にすぎない。ファーラービーは次のように語る。「私の理解によると、最高（崇高）の実体は相位において定期的ないし循環的回転運動変化する運動する自然に他ならない」⁶

さらに、ファーラービーは次のように語る。「月の下の世界の実体がこうした質料の運動ないし混合によって、色々な形相を取る。諸形相が諸形相と交替する、諸形態が諸形態と交替する、諸形態が諸形態と三角型は四角型と交替する、土壌は水に変換する。白色は黒色に変換する等。実体自身は交替しない、形相が実体に変換する際に自らの本質は消滅しない、形相が自らの実体を消滅しない、単なるその形相偶然性のみを消滅する」⁷

実体は、非運動的状态ではなく、それは、運動と変化の中で存在する。実体は、時々赤い色になったり、白色になったり、時々長くなったり、短くなったり、時々生まれたり、死亡したり、時々病気になったり、治ったり、等の状態にある。自然科学の任務はこれらを研究すること、それらの状態・状況を、そして諸原因を研究することであると考えられている。

ファーラービーは次のように語る。「自然学は、実体のあらゆる諸形相についての知識を裏付けるべき、そして月の下の世界の諸実体のあらゆる質量についての知識を、つまり、如何なるところで増加するないし減少するに関する発生する形相・形態変換を把握・認識する必

³ S・N・ギリゴリヤン：『中央アジア・イラン哲学史』、ロシア語版、六二頁参照

⁴ M・M・ハイルルライフ：『ファーラービー・時代・教説』二一二～二一三頁参照。

⁵ A・M・ボゴオットディノフ、『タジック哲学史の射程』、七二頁参照

⁶ 同書、七一頁参照

⁷ 同書、七一頁参照

要である」。

第四に、存在概念をさらに蓋然性・必然性と可能性・現実性のカテゴリーによって、二つの概念に分類し、存在を蓋然性と可能性において考える。彼の考えによると、蓋然性に依存する、換言すれば、必然的に存在するものの存在は自然的存在であり、自らの存在であり、それは絶対的存在である、如何なる原因にも条件付けられない。次は、可能態としての存在、換言すれば、存在する可能なものの存在するために原因となり、条件となる必要である。あらゆる存在は蓋然的ないし可能的であり、これ以外の創造（生成）について語り得ない。⁸

これらがファーラービーの存在論（自然哲学と宇宙論の基盤として第一の問題である）の内実である。この問題を理解せずに、ファーラービー自然哲学思想見解の本質を理解することはできない。

二 自然哲学と宇宙論

ファーラービーの存在論は、すべての世界を—自然と社会を、宇宙と人間・人類を、万物（すべて）とそれへの認識を、統一的有機体・複合体として理解することを基盤にする。汎神論的宇宙の一体性、つまり、万物一体論の視点を探れずにファーラービー主義を理解するのは不可能である

ファーラービーの存在論は、自発的であるにも関わらず、強力な唯物論的基盤上で成立する。彼はプラトンの「現実-イデア」の思想に反対して存在の客観的性格を肯定して、真理の客観性、知識の客観性についての考えを強調している⁹。彼はピタゴラスとプラトンの『単純な数字』と『イデア論的概念』に根本的に対立的に、アリストテレスの『自然は諸実体の集成・結合体である』という見解を保護し、さらにそれを発展させて、自らの世界体制についての理論において物質・質料を重要な位置におく。月の下の世界における物質的構造と蒼天・宇宙の構造の統一的物質性が提示される¹⁰。彼は、月の下の世界の（JISIM TEHTI SAMAWI）存在は低い（下層的）段階から高い（上層的）段階に上昇する、といった、物質の一元的性格を強調する¹¹。

彼の考えによると、宇宙の始元、創造は不可能であり、つまり、宇宙は従来永遠性を持つ。「宇宙の時間的始元性についての理解は空想で空説である。ただ彼らの、宇宙の創造者が自らの創造の成果を時間と無関係・超時間的宇宙の運動によってほこり・粉末によって創造した、という見解の価値がある」¹²

ファーラービーはこの問題についてのアリストテレスの非一貫性を克服して、世界の質料性・物質性と永遠性の間いを重要な哲学的問題として明晰にする。アリストテレスは「世界は絶対的である、そしてそうでもない」¹³と曖昧化して後継者達に困難を生み出す。ファーラービーは、実体は創造されない、それは創造者にはなく自分自身に代表する、それは永遠であり、その前にもその後にも他の如何なる他のものも存在しない。それは他のものから生成されて、他のものに変化するのは不可能である、その時間的始元性と終末はない、

⁸ W・P・デミデチュク：「ファーラービーの宇宙論及び根本的諸起源」、『ファーラービー研究』二三頁参照

⁹ B・GH・グプロフ、A・H・カスムジャノフ：『文明史におけるアル・ファーラービー』三一頁参照

¹⁰同書、七七頁参照

¹¹同書、七八頁参照

¹² アル・ファーラービー『哲学的論文集』ロシア語版、二三九頁参照

¹³ B・GH・グプロフ、A・H・カスムジャノフ：『文明史におけるアル・ファーラービー』一〇六頁参照

という考えで一致する¹⁴。ファーラービーの考えによると、宇宙は永遠的に物質の不断な運動とその形相・諸形態の不断な変化によって充実する。

ファーラービーはアリストテレス教説における「四元素論」UNSUR ENASIR の思想を継承し発展させる。彼の考えによると、月の下の世界-蒼天の下面は物質的物体とそれらの諸形態と四元素で構成される。それらの不断の変化、生成と消滅の過程は持続し続ける¹⁵。

「学問の分離 IHSAL ULUM」において次のように語られる。「もし我々がそれらを分類すれば、その際、火、風、水、土という四行詩として表われる。それらは蒼天の下の諸実体の質量を構成する。それらが特質的・性質的にまた熱、冷、湿、乾、という四つの性質であり、実体に形相・形態・偶有性(AKCIDENATSIIYE)を与える。さらに、それに能動的活動と忍耐力を与える。ただし、これらの四つの根源的基盤に基づいて、月の下の世界についての一元的・一次的四つの学問(科学)としての算術、幾何学、天文学そして音楽等の諸科学が登場する」¹⁶。ファーラービー、四元素は物質と物体の根本的起源(核心)、他のすべての物体の基礎的普遍的(一般的)物質として考える。

ファーラービーの最も普遍的(一般的)物質・質料としての四元素論思想が、彼の物質、形相・形態についての実体と偶有性の思想についての諸見解の根本的核心である。彼は四元素論を「第一の師」アリストテレスから受容し、発展させる。アリストテレスは、四つの基本的性質・特質としての、つまり、熱、冷、湿、乾、という四つの性質を「第一の特質・性質」と指摘する、共に、それらを二つの対立するグループ「熱、冷グループ」と「湿、乾グループ」に分離する。それから、これらの二つの根本的基礎(第一)性質と諸特質の結合体によって四つの元素が形成される、と指示する。アリストテレスの考えによると、熱と乾によって火が生成する。熱と湿によって風・空気が生成する。冷と湿によって水が生成する。冷と乾によって土が生成する。

アリストテレスはエンペドクレス(紀元前四九〇～四三〇)の「火、気、水、土」の「四つの元素」の思想を受容する、しかし、四つの元素を(エンペドクレスは「愛情」と「憎しみ・嫌悪」的と指示する)二つのグループの四つの性質・特質の成果として論じる。ファーラービーは四性質を「TOT UNSUR 四つの元素: AB 水 ATESH 火 BADE 風 HAK 土」の表象(ATRIBUTLIRI)として提示し、アリストテレスの論述の順番を拒否し、さらに「蒼天・SAMA・ASMAN BOSHLUGHI」という第五の要素を加えて強調する。「それらは、土(土壌)、水、空気、火、そして蒼天の五つの元素(物質)から成立する」¹⁷。

アリストテレスは、蒼天は「エーテル」から構成されるとみなす。ファーラービーは蒼天と地球(大地)構造的一体性は、蒼天と地球自らの物質的構造によって依然として地球の「四元素」を根源・中心とすることを強調する¹⁸。ファーラービーにおいて地球の四元素と天体の物質的性質は統一される。

三 汎神論—万物一体

ファーラービーは自然哲学において一連の宇宙論を論じる。彼の宇宙論は、中世の自然科学的限界を受けながらも、圧倒的支配の宗教的、神話的な寓話的空想に対立した。

¹⁴ A・M・ボゴオットディノフ、『タジック哲学史の射程』、七四～七五頁参照

¹⁵ B・GH・グプロフ、A・H・カスムジャノフ：『文明史におけるアル・ファーラービー』七六頁参照

¹⁶ アル・ファーラービー、『学問の分離 IHSAL ULUM』ロシア語版。A・M・ボゴオットディノフ、『タジック哲学史の射程』、七一頁参照

¹⁷ アル・ファーラービー、『学問の分離 IHSAL ULUM』ロシア語版、一五五頁参照

¹⁸ M・M・ハイルルライフ：『ファーラービー・時代・教説』二一六頁参照

イスラム以前、各地域や各宗教によってさまざまな宇宙論が考えられた。ファーラービーは、自らの宇宙論において、「第一の師」アリストテレスの宇宙論を継承し、それをイスラム宇宙論において捉えなおし発展させる。彼の宇宙論はプラトンの「イデア論」と対決的に論じられた。プラトンは「イデアールな永遠世界（宇宙）」を現実世界に対立させる。プラトンの客観的唯心主義の哲学は新プラトン主義者としてのプロティノスに継承された。プロティノスはプラトンの精神主義的宇宙論を依然として貴族達と宗教者達の利益を保護する精神的道具・媒介とした。ファーラービーは宇宙論においてプラトンや新プラトン主義に対決する。

ファーラービーの考えによると、蒼天全体と蒼天の下の宇宙（世界）は統一的（一体的）である。彼は、「蓋然的本質」ないし「第一の本質」そしてそれによって生成するすべての諸事物は実体的統一性を持つと提示し、創造者（主）と被創造者（もの）の統一性（同様性）を強調する¹⁹。これが彼の汎神論である。

アリストテレスによると、宇宙は「一個の封鎖されたドームである」。ファーラービーにとってそれは認識・理解可能なものに過ぎない。デミデチェックは次のように言う。「ファーラービーはアリストテレスと異なり、初めて世界の創造・生成に、特に人類に、そしてその自然的生成・創造的存在における役割・機能と位置に対して深く興味を持っている。これは彼の哲学体系における主導的問いである」²⁰。アリストテレスによると天体は何らかの特殊な「エフィル・質料・体制」から構成されるのに対し、ファーラービーは「天体を、そしてその構成要素を、地球と同様に構成と構造を持っている」²¹と考える。

ファーラービーの哲学体系は、他の自然哲学教説や宇宙論、そして当時支配的であった教義主義 KALAMIZIM に対決姿勢をとっている。ムタカリム (MUTEKELLIM) 主義者達 (教義派) のイスラム古典文献主義に対する潜在的ないし明晰なイデオロギー的闘争を理解せずに、ファーラービーの自然哲学と宇宙論を理解するのは不可能である。ファーラービーの自然哲学は、単なる当時の権威的・封建的・宗教的な神学教説に対抗するだけでなく、急進派 (MUTEZZILIZIM) の思想見解、そして、自然哲学に基づいて体現される理性主義者達の見解とも厳密に相違する。イスラム古典教義思想家達の「神は世界の創造者である」、「神は世界のすべての事物の創造者である」という宇宙創造論(世界創造論)と対決的に、ファーラービーは神を第一原因、第一本質ないし蓋然的 (必然的) 存在の形象・表象として捉えた。神は存在のただ一つの側面であり、その根源的特質は物質性・質料性、そしてその永遠性である。世界は最も素朴な物質的諸物体から構成され、したがって、非物質的世界や世界から超えるいかなるものも存在しない、と繰り返し強調される²²。

ファーラービーは、神について次のように定義する。「第一の原因、これは直ちに一つの確信の成果である」。その蓋然的存在はどのような形でも証明されない、神の存在についてどのような性格付けもなされない²³、などと論じられる。これは、イスラム教義者達の思想見解としての「神は世界、そしてすべての事物を自らの志向と意志によって創造する、世界は「神の意志」が支配する」といった教説と全面的に対立する。

ファーラービーは、プラトンや新プラトン主義に精神的支えを求めるイスラム教義者達の思想見解としての「物質的世界がネガティブである、非創造者達が影である」という思想見

¹⁹ GH・B・シャイム・ハムベトフ、『プラトンのイデア論とアル・ファーラービーの理性論』、『アル・ファーラービー研究論文集』、四〇頁参照

²⁰ W・P・デミデチェック：「ファーラービーの宇宙論及び根本的諸起源」、『ファーラービー研究』二五頁参照

²¹ M・M・ハイルルライフ：『ファーラービー・時代・教説』二一六頁参照。

²² 同書、二一七頁参照

²³ ファーラービー著、S・N・ギリゴリヤン編、『学問の分離 IHSAL ULUM』、ロシア語版、一五六頁参照

解に対立する。ファーラービーは教義派を非難する。つまり、宇宙の創造者としての神と、神が創造した宇宙との間にいかなる統一性・共通性もない、つまり、創造者としての原因と非創造者である結果との間でいかなる統一性もない、という彼らの神学思想に対立する。宇宙の統一性・万物一体の思想 — 自然主義的汎神論において、神は自然であり、自然現象の第一原因であるとされる。

結

ファーラービーの自然哲学の根本的特徴は宇宙の統一性・万物一体論の思想、自然主義的汎神論である。彼は、物質の永遠性、非創造性（質料の非制作的本質）、非消滅性を説き、天球と地球の統一性・一体性を強調する。ファーラービーの宇宙の構図は、アリストテレスのように「閉鎖された球」ではなく、むしろ、物質運動の統一性（一体性）によって人間に認識把握可能な、人間のために制限されない、開かれた範囲である。確かにファーラービーの宇宙論は、唯心論的、神霊主義的欠点・欠陥を回避できなかった。しかし彼は、教義派達の「神秘的構造」によって人々を脅迫する無知・暗闇に反発し、人類が世界を認識把握することにおいて重大な啓蒙主義的役割を果たした偉大な哲学者であった。